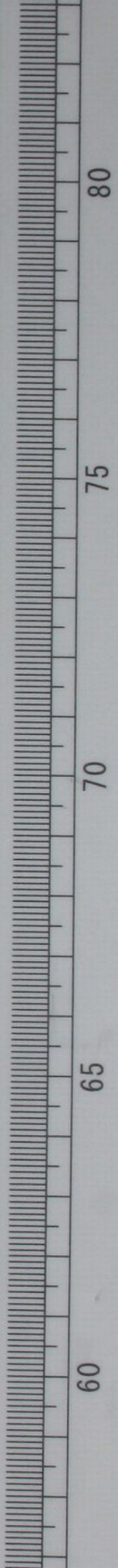




中村俊定文庫
文庫 18
426
2





春

波清し 蕙以 須之 帝さくら 狩

樂水子

夏

さきと人 雲すて 水に 暑の 亭 全

秋

初 新也 在 秋 暮 しく 々 土の 思 全

冬

すこ 更ぬ 雨を 上 志の 庭 紫 哉 全

豊後日田

鞭石亭



歌仙

樂水

本は雪花も雪野にけし山
 多紫ひさ梅し吹くふ空
 大文字や身は暖もりを祈らひて
 かゝひの窓をこの春く呉絳
 望の想れたる春よ八雲さ毛色に
 くら川と牡丹花をまじりて
 神のあて相撲もとを待たぬ山
 僧冬きんさぬ女の家
 寮
 樂水
 舎持
 巽我
 淮山
 松架
 巽我
 今持
 樂水

狂吟師の空量はまをいけし
 毎病は下早を土用八專
 新田は名も傳す寺号何のほし
 舌も叶ひし大東の通る那
 風飛うたともさ山田は山歌し
 年も四五十年佳々深入
 素人の音は岩をきく朝の月
 三ッ候く掃く流星は花
 糸は指は個付と糸は結は心
 子業まじく欠落乃供
 淮祖
 巽家
 松架
 今
 樂水
 舎持
 巽我
 淮山
 松架
 巽我
 今持
 樂水

名

能書もとの心うしれ園茶 舎持

異見をよこし跡にま風 樂水

お上し磯の青とも着菜摘 誰止

異身乃ききく又苦小衣 堅家

笛好ハ横よ余海のを故実より 誰止

はもくくを蔭く白雨の海 松架

因寿の擔よ同勢黒く那季 楽水

吉日の向よ台し 柳栗 善持

拙りき後く 輪乃齋懐ひ 誰止

平生遠報又登毫やあ家秋 全

鐘をくたのめものあ乃音 杏架

沙走のやあ又泣まことあま 堅家

恋すく小空蟬の土藏ふく 誰止

觀世をかしはけふ小着殿 樂水

心はくハ隅田川原乃小豆餅 松架

犬能 鬣も括さめなまりり 全

中キ 善保望敷くを明日の花 舎持

馬帽子能細も永き夜泣 巽我

半時菴

半時菴

初日遠海より一日を驚き都の如

梅

去年の頃より抱懐く梅の花も今

題表日

塩梅やあま一時風乃音今

春無

嘗ては啼ける石も入日可如今

上巳

親寧の神の勢築代寺の雛今

哥僊

豊後日田

見ね程小夢を疎くて耐るゝ今 巽我

飛脚を仕立寒菊小酒 舍持

築郡踏山乃名のほこりて 松架

銘も切魚子豊年此跡 淮岨

月照て森も深邊も炊煙り 其外

雨路此香高起岩乃下道 舍柳

快き祠福し一りくま此秋 舍持

去々去々女房金借て来は 巽我

世渡り多抱きてふ法あり
唯岨

燈籠乃灯も殊新盡
松架

目此草を拓小卯月の雪止し
舍柙

馬り身おも風薫きむ
其外

きふも里まき余りの麻れ子山
巽我

帝の火礮小籠は考行
舍掇

名月此角のとはは表の月
松架

美の三里れあこ里芥摘
唯岨

吹きく乾被の巴の汐干泻
其外

垣る見乃尻敵く燕
舍柙

大把乃擗れ賣進信泉岳寺
唯岨

風呂の元まは罪を袖雪
巽我

後進何れ着志何もちり松上り
舍掇

三ッ四ッはくま擗擗あり
松架

醉醒や嵐とふしし白水碎
舍柳

遠きと紙慮りまゝと産む
其外

氷深乃畏負の過と生下り
松架

喧嘩扱ふ内も貪負流
舍掇

上乃白髪赤物おしてちを尋
巽我

淀の大工の列々朝起
唯岨

昼中小尾花乃招くうろく新 今柳

鶏路小鑿振く以土竜 其外

十少 種小卵葉包にて著乃鐘 松架

腹鼓 此 所 枯示 割 巽我

霖雨ニ感状此を破色襖 其外

滝も抱込む屋交ある哉 今柳

夕日菜毬場かア小兼乃ゆりし色 今柳

草若くや冠着新鶏 淮祖

志々ぬ飛一見の音行を妻

婦ありては八重花は路をし

乃と豊の前州中はの漆ニ

船は赤さるるあは月花未

さくくそく待くすらる

見へ侍新ハお見ハ何処

たゆらるるあは路を

豊後
日田

新のよを祓らるる 松架

敵く神の爲と

ハの坊宗通結西より卯を
 引くも是老沙乃德澤より
 と傳解たるものと之れありて
 話しあふ事も未摘花の時
 道をしたし老沙の二棒を
 も舟ふし保ものなるも
 ますと具澤を及し給ひ保かたし
 梅の香のあち内者ありあきりきく

全
 淮岨

少く免ても室よりそひぬ探一の都
 全

換抄各あ書略く

舍利弗も依名くをしよ初時雨 其外

全
 海上の程さしあき 水仙花 湖時雨

全
 与し芦をさるあ新録やをく妙 春荇

全
 待湧く飛くくん法 團爐裏哉 可曉

全
 停くし道乃は何川 雪初あき李 故曉

各あるまじき

以やけ少き志のあえんを波に
 飛くくとも志はしいさよき牡丹
 半よよこのにけくもや冬の富貴
 兄の鳥やふく鳥の何由と乃唐
 鳳水

八千坊はうきく地屋、是時をかし

無事よ急ふ杖き雨のわくひ物
 桃之

今

夢る中ふ笠の宿ふは川青の那
 桃潮
 け川ちや州の中りたる玉は少年秋

そのまあると略す

日よ早き其香や 霜乃玉椿 岩秀
 夢り夢ふも乃驚や はるきし海 九鼻
 あり詔とを坐して 燈ふらとと虫飛
 冬も香を配るや 花のなをゆえ 斗弓

今

亦も又風雅の神乃 猿と妹の那 儿嶺
 云の紫は子教も玉交し 冬をさ 海賀
 初冬のひ離り梅乃 少月心の草 里水
 鶺鴒 披月 何のひ 清し 花亭

挨拶前出略

一陽を汲得く梅乃ちくが系
室以れ陰を初るふやあつた矢
松夫

全

早咲の一枝飛や子、乃宿
疎葉よりうき置縁や、寂か白ひ
白玉を伝ふるまや雪のたけ咲顔
かよ分は、雪の下持れは白ひうき
茶の花やてふ紫口切ふも今
待得く花叶の満ちや冬乃宿
百川

青角

車牛

百車

雲函

角馬

全

日田庄手

猶よ赤い隙も村あはれ少き那
芽はくさく風や小春の自然あつて
梅南

全
あま略

芦吹也雪も孤あつた雪ふり鳥
文泉

全

風吹才自り人雪乃ち那の枝
梅支

全

全西山

芽はくさく那も小春乃ち麻屋系
吹也は小春乃ち那も小春乃ち麻屋系
杜山
蘭吹

携杯 前書略

日田隈甲

あふれも手傳ふき松乃小春哉 時尋

清川乾の中や小春乃笑ひ山 蘆士

花子葉に見えとて厚し冬牡丹 可鷺

待う多て傘を川のしき晴雨か 里舟

初々々や茶の花は香もひ目もま 秋吹

新高く冬粒と冬を玉うさき 汶水

今

行向冬聲 和清し

華馬

小春ちと空

哥仙

立春在臘十音

豊後日田

かきけーや春を待霞ま川の陰 湖時雨

襖ハを久夜霞うす記、返 舎椽

常日中鏡もい川ー、笛すそて 可曉

車をとり小引ちくくは茶去 春和

手軽さハ飛やくあむ小帆の神子 故曉

夕くま毎りそや大あ多里 桃潮

著笠耳小山うちをとけ 魚人

雷よりも大ハ花のそとぬこ 湖時雨

过うも呉竹縁乃婦一此敷 春和

何持子登とりあぬ什を川 可曉

眠りあ一盃きあむ秋乃や戸 極潮

本絨をみうた上得名丹 故曉

鯛ふゆて岐多振看下子医老も 今接

としとあしとを編し天井 真人

仁王うみあんで寸の海 湖時雨

落ぬはかしも教外子傳 極潮

成角行の案内さそく花の峰 妻糸

度杖く尻角く牛 市 今接

橋乃上井壘をぬきて凡中揚る 可曉

手あたくひの産日替 紋 湖時雨

垣乃見の穴かく夢事とと光き 故曉

菰を若かきり産珠をいふ 妻糸

八景の来をうをひし漁り 魚人

宮の奉加乃足りふある 西の曉

えせんり包を残さぬ明の 極潮

たふきぬと右をちが目い 故曉

近年の蘭の志くぬ船又右 善接

種々り味あふ子茶乃 魚人

馳騁りのほり川く程ふりし連 美人
 名所の外をさうに献立 妻和
 だく庵き一向寺乃大工小屋 遊時五
 むらうしかこまとやし松 松遊
 當音も四季耳 轉心はうりこ 故曉
 さしうまと色は雨の中入 可曉
 貝原や仮名ものとも花乃友 金持
 三川をよはえみせ 後上下 魚人

歌儂

豊後日田

吹声は危き水のほり音かか 可曉
 鴨も入江りりつら海船と 舍持
 大厨杣もむさし一跡いさきて 鳳水
 香おむまハハゆの如人挿 故曉
 不ぬこおまよのさ心雷の身 今持
 ほうぬきとめてまは嵐屋軒 可曉
 方丈は算をうらむ麻の夢 故曉
 立ち筭もらちて 暮石持 鳳水

智恵付て天の浮橋さうしけは
 池り流とす飛子舞臺子
 名而已のそ近紅生きの一帯歎
 異年おちりしき夏のそ照
 そりとの寺内の宮り大母屋へ
 古今もそとせ入唐とす心
 異見りお道具ともか招来梳
 垣るこんうつと窓と障の果
 神花は殺さきさうと可り
 辰負に居りも梳の酒しは

の曉
 倉橋
 風水
 可曉
 今橋
 故曉
 の曉
 風水
 故曉
 倉橋

まと搦ぬ橋一をく保も算加錢
 天倪も出るとふ百の旗
 吹小川あ世界れちうふ砂の物
 章魚の足うとれりひつく珠漱
 一生を替しられ室家たう段
 不断さうとらむう提重
 女房おうあはれ大磨斗のあな
 あやうのそそのう船へ手を川
 名月よ裏表をたに住居あり
 廿荒しあお山子の神あ、海も

の曉
 風水
 今橋
 故曉
 風水
 可曉
 今橋
 故曉
 の曉

□ 卅三

蒲萄相きより里とし多味友の相
 今樟
 仁王のあつとつめし田楽
 故曉
 欠落り珍事の競踏す屋内
 鳳水
 珊瑚くさけし新地定まる
 可曉
 播ハ千の矢先のとく多里
 故曉
 御朱印お給うん丹頂
 鳳水
 新口も鈴よ替りて总乃里
 舎樟
 世帯せんまい唐さてあさ風
 故曉

菊の下にあふ壽をまきし世のし語
 己身叔置ぬ早苗るゆりも葉を
 さし芽を搦くおかくは眼を洗ひ
 結とりのお蒼の玉をを後こひすに
 保よ初め家よを盛あつてを
 侍儂ぬあや顔中も多酒をお
 しを縁もあつ初めあしを
 きる陽をよりお白の心さ死す純子
 の口よを白くさいとく免てあし
 火し盛より山初ふはを葉袋成

□ 卅三

烟叶とぬりあると香ハその山一也
又花を想ふもくはや花菊志く
其外の名ハたのくもの那とハ高橋
の樂しき世にす川久五十種乃
花子よや多諸好士の秀吟とんふ
も又樂しきとあははや

時人を

み山も逢ひや

菊乃花

湖時雨

述

哥儂

豊後田

常盤本より秀く古く落葉乃 春行
雪もたはけし侍かこり 雲馬 舎持
建はく棟を筑波の雲帯亭 海賀
釜のたまりもうさふ 龍うせ 桃潮
追使の心月見の友もくは 可龍
吾を耕はす子のねきぬし 葎
次之信田の村に軒たもふ 棹
出世はかきし小摺白く 飛 賀

妹（さ）も美と画されぬ若白髪
 水鷄小野多くきて上首尾
 不雨ク活のこしき侍沖の如
 庭見る色侍小悪筆の状
 片意地ハむのしぬうの福の神
 多ても月を藁園りやむ
 浮ふしも厚しちふ花乃糖硯
 茶の妙人小あふ坂乃妻
 鶴つうハの空目そけあれ等
 うし移渡りう弦の具四は履

潮 童 荇 枝 翠 芥 荇 翠 枝 童

入相乃あううさまを侍任任指
 樹々此留之まゝ十月の松
 天竺の記りもあろ山さうし
 棟上々の餅もまき暮る原ちうく
 本の下園り善良子定すか
 神より様嫌朝風呂毒思堪
 おもひの森の枕ふ不埒工むらん
 雨後小服さゆすし藤塩草花

若 翠 枝 童 荇 枝 童 荇 翠 枝 童

飲志は海三五の望も月の客
 のこりごとく行日追うれと
 飛とんと音り別ち水の境
 狸は家ふも入亭 任職
 雲くさき幾名のを傳うたう藏
 使者銚もとも傳の駒
 産宮へ地もか—戸新々も花
 峰の日も飽うに五々の喜風
 賀 童 妻 苻 海 賀 可 竜 抛 柳 今 棹 桃 筆

哥仙

豊后日田

明ちり起星のすうとや友千鳥
 石落ひみふのま不おさ川音
 眼息を雁小札可く交ちて
 雨を付くく—雪のまき波
 玄崗、かほく男乃船のれあし
 神かたらの身を流家門出
 瑞心離と脊中合せの鳥くはく
 葦心と笠をく通ひ古さき
 岩秀 舍棹 虫飛 車牛 角馬 挑秋 百川 鬼風

廣東を口よりして舞臺飛
 自慢をめぐくるところ
 松風の雨よりおかる頭陀婦の海
 鏡のり来も大和治小あそび
 願を空よりもくこと
 新酒の酔はれぬ増明
 秋もさかふを若かりあそび
 杉を画り日冬鼻うきあそび
 寺を控は花はおりの十寸鏡
 古きも糸掛ふはなうきあそび

舞 臺 飛 牛 秀 持
 風 川 馬 能 飛 牛 秀 持

おし妻乃山流も妻の縮着山
 舟細よりあはれあそび
 信ちの解虫と香車乃人つら
 半ハ晴進て夕時は
 松かしのつらつら水の水の音
 雪かしの山とが
 主座所 唐天竺乃寒 けり
 風も抱くはるはる
 あ葉もあそび
 梅り並本を月乃足代

能 持 子 秀 風 川 能 馬 能 飛 牛 秀 持

封きくぬ文も舟又心秋乃骨
 向ふ鏡も漸さむさ窓心
 山とあつ有馬古彦の牛薬は亀
 おり飛りてハ淀川の山
 ひよこくと眠りも交々三あ三
 夜よ玉すく替の友設年
 宿とまハ一日あキ、花乃旅
 叶の波ゆるさるハ一里
 中飛
 角馬
 兎尾
 百川
 車牛
 岩秀
 今持
 挑新

九月

玉相を踏麻と夕アもかまりか
 舎標

門人百位宮本園の奇石をニツ神
 しとあり是をまつとよせとと
 は地、ありしとよせは名を乞需
 ともあつるふりしよ新はう
 はとあつるしよ

玉相を踏麻と夕アもかまりか

西米聖を直瀬戸口村東取方、
 東極の縁よりきて一宿すありし
 幸あるハ東武るあり

是も縁を神のちあまは後り乃宿、

漸初夕日田博多屋柳之軒又長

樂水君、拓りきり

國度し、永くすくろの富貴也 舎椽

東武より法陣陣と侍を

餘慶乃余ふもいゆに在の法、

松架亭、拓りきり書略

久くやふ世何と松と枝とと里、

淮北より、核抄 あり略

ふくめの伊勢分ものころる層、

豆田園ふりふり、一層起り、珠珀 井と窓あり

水清し徳も瑞珠のたはこ酒、

撰題 哲言文拂

三井すくく、噴を何と井の世日哉、

手燭

掘く坊子ふ小妻何とてあひ子、

序水

けしと女此にふもわりはしあふ、

埴月とりふ小山は観音堂あり日田 寺社二人四人とふ指す正西の明を ありたれと左右は、諸本よりかこまれ 其上秋蟬多く動てはと後へ追せ 二三子ありき、京色に家あり

本堂のうくと晴を、是小妻空、

十二首云云あれハ拙之拙遊を教
道中詩ハ此はくさるる、まよき

む川ましや七字よハ、子花の露 全持

時雨

去り晴らけし夕暮の山を月見仰

又

盲人の頭をたそしし夕暮の草

湖時雨の花壇より

家根を津一月、子本小妻、女菊

夏田の徳好士、拓く道、松抄の
句くくくくしりれを略す

系仙

豊後日田

表法井の湯をちの道枇杷の風 全夫

寺子法舟の船の冬去ぬ息 全持

棟上ハ本挽、袖も捲こりあて 青角

名月海く思ハたきさう海山 九白

名月おおれささしらの経舟之 全

芭蕉の鳥かたきさの心音 全

む川云も塩うらたき、神の素 全

持病つたあゆまきさし百の歌 青角

赤つぬ喉の母ハ泣き乃業 全

まふちまふちのいのち祈のよせぬの 九鼻

志もこの海のらんもある志の風 全

運吟く顔のまこと曲の 松丈

山川らると海生の薙の一角獣 全

大工すりのろろね 志加多 志角

ぬるき一海やまも物うこそま 全

人志ぬけくき酢の味もたま 九鼻

四つ月但ま空扇を花のよさる 全

薩下々と銭も月も心 松丈

二 西京版も暖味暖味の春か始りたま 全

台息といふぬはらふま 碓 志角

夕陽の射仰の袖ハ岸ハ花寺 全

驚きよこさ乃おのるまり 醉 九鼻

花巻うこまいたし かつ銭じ 全

ませ海くぬく 阿保はるの戸 松丈

りふは細布子も格寺乃具之 全

甘きんた徳心奥り 志の白 青角

杉山の位を凡念のたかく藏 全

本魚の遊く一ら雲の宿 九鼻

大空を見まきして月影を
全

みやくあきやうも
松丈

鶯路の近江の君を
全

律義一過村乃
九皋

畔つゝ心持志
全

心さとも軽き志の
松丈

時津風伊勢くくと
青角

凡二三里水きり
全

歌僊

豊後日田

冬へ鳥を配りや梅は
斗方

森阿やあきの岸は
舎椽

成觸破も磨き目の中
儿山

富き又風のなとつ
斗方

星あや三子丈は
春行

聖をす家留はつ
虫

漸寛し煙も志川
山家

あ郊は鐘は果も
消

腎虚をぬ 影ひなきん 遊の海
 ぬるこい 顔紅い ちをやさ 太刀
 方ちのこい 遠ひぬ 花あをめ
 書くく引 裂けけし 糸その状
 山川の姿 尔ふく 相
 曉月のこい ごとく 醒
 身入も 寺と 肉とのる 夢
 御指ふのむ ぬる 花物怪
 花巻り 寐う ぬ顔の 世界あり
 迷子をたし 又 妻中の 春

扱乃も 征り 似之 縁 汝 夢
 与雄并 飛指ハ 押ハ 紅
 悟りて 疑 波 紅 昔も 騎人こ
 六月の 留を 建の ぶぬ 風の 神
 大筒 打ち すす け せ 風
 郎 斬の 鬘り を 代又 志て せ 夢
 須磨の かこも ちん 夢 かし
 明者 を さし も 木か せ 木 なる ち
 雲 夢 心 と 夢 木 の 空 の

二
驪馬月枝抗のきりせりや
一層またをひるきさしの綿
腰のきぬ衣をき珠おほり代
鼻の先もはよみ福力
河内山業流しひととと兼せ
田、り舟り云傳る樽
降埋之甚所まで花むしり
者うゝひも先山さうらあ

狂手文泉小く

眠ぬや家小みらけふ山地飛 舎棟
隈町時人、権掾

初時雨本もく涙目ふりけ人、
全華馬一

争ふゆふたれ長く雪の馬、
十二所梅ま、きけ

高きぬや家ささきと笛吹の床、
杜山子業水車よせく

あ他の笛も車てふとふらふ、

探題千鳥

舟日行僧を山うふや磯ちりし
八千坊

奇饒意

醒井やかゝらちりささの苔結露

大徳経

神代あふ十三佛やうはく人

盃

酒中花のちゆくも梅のかほり哉

因幡表

善老の滝を笑ひ人以後是うち

若餅は海老をのをもふ経賢

海老細やこ指しかゝる乃鼻殿

年越し豆を赤ッ経賢

福の肉、豆一口は冷めてもあふ子

右左年浪舞まての白草賢

移し扇は南風をのやう経賢

狂身七人八条道の表乃縄

夜廻一山也鏡を拾ふ経賢

鏡乃うゑとる多目とる月之海連

海をえり見たりあふ子

一日高野村より探題

神祇を

為葉すくく清き草か茂の晴肩の本 金枝

春帆松意

下も舟帆の下き春風比丘居舟

春塔意

古き塚し流きも社乃元無寺

環家水仙

依あえふ水仙や河のてる醴

連中探題左

白雨後

三日めやさ川と河つさも沙下写 春荷

十四日盆

玉多すき鬼待宵乃あさる那 鬼風

草野葛

吸ひあむすもくし野土きる鳥 鳳水

夜乃和

餘下の戸を叩くも母の水鶏家 鳥枝

田植

盆乃影もかろ舟用くも可南 魚古

三十一

井戸智

智ハニホヤク夕ノ也早クは井筒

春水

神祇雪

雪の江や雪は系帯の三月

百川

冬は麻

角く前カ海あらしを麻は枯野哉

潮車

春鞠恋

涼しきや振袖をさし新しの飛

春賀

枯柳

雨を風を麻了そを風枯をさし

魚古

火燵

人の代はものきよしのの澄路島

加羅女

茶乃花

茶は茶や木のしをこの為燵

干岫

薄氷

氷乃意ハツ川に氷を薄こり

蝉雨

風

六のくしは掃きや櫛のはるも

梅丈

神祇冬

清の風と合勢境や厚ふゆ

鬼風

牛車

角文字の轍より起るまゝの事

故曉

古寺寒月

眠るて次消るや月が寒山寺

挑潮

冬祝

朝日に冬至のこゝ酒杜氏

八千坊

仲冬中の三日鬼風梳社の二人は
夕抱せしむ其名もさ英さふり
詣居すこぎしとやいしはさきの
髪もとのふりてとあはれに
雪をもとあはれに

かきうちてま原松や霜初乃と化 今様

鬼風先もちて此雨の漆系
冬に さらけおせうは

中山といふ所にて本村の鐘を鳴す

中倉や日田の山茶のまがら

岳城鬼といふ山よりとて嶮岨をす
の月ほ發示思及る山の名に
柳枝百もさうと云ふ年ハ十四也

猿眠る山もまぐ乳のひひ 柳枝

先達お鬼をくまをさふら

雪をちや枝のこゝゆやうのこゝ 鬼風

予ハ松葉の賜ありて地をふまは

及あらし小沼ぬ木の紫花咲きあけぬ

多枝

名よのさしし花月川のみさきも
あまの国しうらた法子を詠たを
て川ささくまよいしるの竜を鬼
にやま

月巻も疎竹詩を 波乃を那

鬼花

極新すあしと

瀬ようらむ高きや 波乃を那

極新

は二句より多葉とさく連なり
玉冠若くし暫くやまらぬ
か人あはらしあらしあらしの聲を

屋もくもや雪のそよこに玉屋の谷

今枝

立山鬼石坊とりふるやと
あらし雨あまきりも降り
しきとあらしもけ鬼石の
予も又んあらしめ何と
あらしと晴天を新

可雨とも引よめや 宮は一

かしの雨のあらしし
あらしとあらしとあらしと

かとしあまきりともあらし

立山四百豊のあらし竹屋の

あらししあらしのまをやす川の冬

下山鬼石坊のあらし
あらしとあらしとあらしと

あらししあらしのまをやす川の冬

九州新地入りしよと太宰府の
 清原を願ふ事詣の志し屢傳り
 町奉行にて思ひ立ちんと云ふをよ
 手はひくふ進出長業と見せし松原
 乃其業先成りし事味くも其地を
 程あはれよまうせしといふ事
 成りし者しよ自田の連社もくそ
 此よくとせしよまうせしといふ事
 連社の石玉を渡りて光りし事
 と其月も言鬼伝を傳り日田を

まうせし事加々春ぬを傍也

越くれとつらき高し能らもくそ

倉持

山口朝の辰山あうまの山
 有王丸の墳とてえん地

守り古きまうせしと云ぬり墳

開村一夜川の築あり

岩まぬやちとまの地り築あり

榎坂おび坂をむく事宮園山を

藤原山あきともまうせし事

志波島を宿岡松村のりぬる
 了智天皇の傳制心枯の田代

刈り取のちおにもぬる事

あえはちやあまぬまの宮はけしけ 鬼風

三花菖川とらふ大河ありてはもあま
大河のあらしあまにあま

あまのくさくさ大砂大指乃はあしれ 鬼指

くさくさ大砂大指乃はあしれ

あまめてけけ汁もあまたの子をけり那

北四ヨリにけけ汁 長者所守

あまのくさくさあまのくさくさ 長者早

同桂司村 鞭のさ

あまのくさくさあまのくさくさ 鬼風

六本松城寶満山大指渡れはあま

あまのくさくさあまのくさくさ 鬼風

太宰府ふいふと先連歌屋坊みそ
くさくさ梅の御守を頂戴しす聖廟、
参詣す御本社に結搦はひもさく
ありすく九州に諸候御歴々たり
法奉納の繪馬燈籠數く猶又皇都
東都及難波其外諸國地下より
此繪馬かきまをかし川くはあま
御宮の有りてさ御神前よむく奉
進ハあまの川くさくさあまの
池の鴛鴦鴨も人馴せ飛梅の古木
かきくしあま上久て行はめいし尊きま
のくさくさ

あまのくさくさ

あまのくさくさあまのくさくさ 鬼風

此の石をヨシキニ観音寺戒壇堂
宗匠都廣橋を築き八のしきり
とあり少小多子と不礎をうり砂石

詠らるゝ 舟尾もあし 紅冬 木立

冬椿

朝屋州ツニヤウノクニ 捨友博多、
恙也書若岸、系諸宗福寺と云
禅院則福岡大守の傳葉松は松
系の間より千利休跡茶社地をうり木の
あり也

茶の花や松の木の盆も 天下小名

ワキアテ びく神ト 小歌なり ちりり 叶

造宮の造先を千クラカ神とあり
玄界灘を向ふるを風はあしく葉も

とくアアカとしんく 雨のふる葉風
とりの海にをりし海しサニけあきて馬
色とくふふあり松物屋あり 市仲と葉
公羽の松跡塚とてありくさサ三尺幅一人
程の石面より不老石ト云先塚、造神ヤニ
葉仲と云ふ

と 詠ふ 一 と 白ひんせの定と哉

引田松 松葉のち教坊をこ香椎の宮
まはり

昨非より 香るるし 冬のは
冬も 松 推の香 清し 神 や

鬼風

綾衣として安齋の侍ちりし松大木
よ葉の神あり白ひんせ
世の百多子をこり青も色 葉障りも
見難きをあしむるも忽鬼風傳の好物
大目小て川うあをを並用さすなり

鬼風や首は何らきも玉けり

福岡大西村に姪う孫名は濱

塩竈やちとといもこの姪の瀧

川の松原より心ちりくとも

半の松サツワリの松月くも川に

右の方には畠邊打らうまの音すこ
多しくかきこえ入信宮の心はくもこのか

荒海や障りの日しよ川邊の月

搦井原ノ井 河原山 前系 赤村の
紡葉方止宿勝軍山 神宮ちとこのか
了心め 一自皇后三韓 海船の形
け不まは後髪をよ上ヶ後ひれ松と香
臨ふ石とて小社此内よあり

海王花お玉をしあや玉かーハ

九月末村を立海江村 怡土濱 娘は

唯島やあひしめさきて神よ系

橋山 玉島川 ありてし

目小及ふもの玉しほや川しく連

濱 赤村甘父方一編 越月 勢月 小多
虹の松はつと云ありせの松系より

又も又とむきの空なみみしの松

嶺中 麓山を

飛きぬるやましらの麓も山は

をきあうハ神の威 厚たわりク那 鬼風

渡の神社より

及孔も照させ多戸へ冬乃月 金持

松浦川をりこ

何咄すまほく川船 友ちとらま

産津の傳播下を二見して徳次郎と

二日弱唱時を裁す向ふ又岩盤山を

とよみつ道あると申の又三つふちあり

名忘道川 くら後かき山も雪の明

堀湊より船浮く海へ魄光あきくと

うきし 照や何と老くて子二日月

崎 野や温泉水と桑の堀者言はれ 鬼風

三百俵は屋所へ御持松原大村と若

四日大村ヨリ船をのり長手とふり波

海上五里風波はあしく元谷と云山

よせよからうして船をりおる

鮮此口ののの進りも谷の海里の火 金持

けふの色洗切と去を而と人を雇ひ

又つひ切をを石臼して山々を越す時

四ツの浦長岑桶を町田中化算十

方へ是 丑日可加百洞狸友ちと桑内あり

長岑所乃ひ唐船と二見各小船の

のりて湊口は出る古伝番所の巖

重魚線船おきとるのせりゆへ

る口岸は西洋砲臺七とあり

うらま浦安の園第一の宮跡ありし
みづらきよふし色せ日本の門かきよふ

冬椿

白ふは流芳遠く又柳の海上に里也
と神先とふふふふりよ原船又運り
の法著所要害きひしきよ船中ハ
茶手酒お盆くふひくをく

なつらや 神の法先の定く

奇台町の娼家ちくこやとあまを
確を又ふ水庄月の夜ゆを重出の
流きよは月をかくさふ今ひ岩湯の
流きよ奇産ぬ月をふらとけり

難波何か白んせの夜舟産

法海二人、きす

系よふは三節舟対社ふつり花

九月路の紀原と船依宝珠山乃
舟天と船を請る風さちて波
あつし海上のやうくをわは

波志川よ宝珠の山は眠りゆふ

神先よ系詣

神の蔵よすいては國米のふ香ゆふ 紀原

紀原極くの催し宗福との素寺
て善夜とふふまでこッホクは倉屋
た節のこはあけその出ふあは

えんも 神縁も何れも益宗翁 今持

田中居る巻新宅のかたよ

冬牡丹鴨の松の本はけし殺すも

冬抄

十日白浪の紀系と因乃長岑を立
目見立許知上垣良松貝伴御早
大村の御ふは日白のたし
十四日 松平千綿親の御を存て

岩とて動くも行くも行く川の冬

酒伴武雄の御を温泉まで

抄らんせぬや湯あき三月廿二日

鬼風

空たきし湯のこともさきの花乃見

冬抄

紀系小峰の御を依聖の御を及は
の所と云ふは法橋守とのあり法雲
の御はともち内は古塔ありを
傍都よりこの什物あり中よ

就今度上下之辛勞は相坂西

二十三年國之船可為か世しく津

尚之状必件

平中納言
教盛判

安元二年八月廿二日

本末系親入及に

又

於祀吾國嘉世津往昔丹波少將成經
平判友康頼信實備前疏菅流江流
人之別業本系親入道上下能教辛
勞以為確者美緒年中納言教盛判之

□

三十八

書出状右案観歩線離有之於
渡重者放矢之儀是可有之且法橋
寺に遺 重く嘉世律為規摸如斯
然者敷地一段三畝廿步は本石
走斗ハ并余之申詔令裁許云

肥前侍従

寛文三年五月廿三日

大ニ應の状をよみて一白

申し候もやあつて

所を遊ばあし遊ば

令掇

姦一宮温泉市下の湯ふありて二人
五回りの入湯んやま
寒垢離も五もんよりの湯治の那

令掇

其夜神降り泊り十六日夕留米より
府中より若日高りぬらふ言ふ山宿
寺細二白

お月ふりまに雪もふもぬき神より死
神を抱くつし神の音や幾九十九

鬼風

十七日府中を立善及寺ツ子
四五丸割井古川宮村同田ヨ子

籠くや海多んよ

令掇

巨田、海、り、華

七の御日田永山天満宮

言も程一夜も子代は神事と里

舎指

今大原八幡宮

杉杉菜々多くやしし對ねねとこ山

柴水君、清暇をとりて夜は此を
行けりやを鞍鞆の吸との生くを
教白とてあまし

鶴籾や口よりまらち、清なるこ

すくや扱方より置

井の湯字は沸きし富貴軒の冬

壬辰十日は豆田を出立者送り給ふ

徹書記とすりちりあつりあをまは

そを云録していつきもふあま

旅中の吟君と代のは山畑あま

ともよ目を是すや誰の妻わあま

日田より小倉の石は香まよふ
り野田よことあま

十の強の香来春をこりや春さくら

赤馬屋河津陀寺まで安徳帝のま像を
おし文治のむかしを

あな、すなりよ一人雪の月

玉備は日下のまよふまを船言

ほもよー表侍さ月のたのこ

年月立表

梅子香多し 暮空の燈は 可那 八千坂

歳暮

去々ぬ飛や 梅もくや 年暮の玉柏

今船路の吟

帆は押櫓浪の巻路や 望し急き

彌庭

餅つきや うれぬ 女の神あそび

今昔 壺庭の吟

篠以 縁 宿火 燵 焚 雪月花

冬之吟歌仙

豊後西山

涯^{カカキ} 日の時 暮りや 冬川 時雨 杜山

千鳥よ けしき 仮りの 流 一 既 舎持

極 留る 杉 山 杳 風 志 寄 流 寄 井 蘭 吹

雪 寄 草 心 船 寄 大 工 圃 富 小 鳳 水

登 白 々 記 札 を け け 玉 兔 文 泉

渡 し を 吟 小 ね 梅 庭 春 桃 潮

行 秋 の 垣 小 冬 風 の 片 あ び 春 荇

影 同 じ き ち 志 の 女 文 字 摺 梅 丈

うづり香も小倉塔の軒下
 赤のそかし糸吹き代 杜
 草水く汗を入ふと下目をふ 金樽
 那多細指さか小はまはま 棠
 小人の正色もあや軒乃花 柳
 二日の月よ願し昔天 妻
 新未ぬと服を若くは代 梅
 清平調りし群かりう告 文
 花盛り八坂の塔も八重た川 掬
 るんく袖は時をう川妻 里

名
 草の跡やさ記を伝はぬを
 瀧見よは笠の後光なり危 柳
 持うとあさハものう起常 ナカヤシ 棠
 振う雲のつらむ 隆景 風
 小倉のいかり記ううへの雪の如 妻
 か幸のさの川の脾胃虚し 眞 妻
 宇治川や白ふの宮は古戰場 文
 川樂くく 藤 梅
 縁先の首も玉まき 翠の月 里
 足るる知り 極向捧 檀 棠

火縄の火運者^を待ひ^て〜^と猿
 矢者の被馬^を走^し川乃石
 夢^ヲ徒好^キ性^を急^に夜^を願^ふ
 昔^の乾^るを^をす^こ娘^あ〜^雲
 不料^理も^付て^魚〜^酒と^胡麻
 四季^も〜^想〜^一は^志り^中
 山河^も〜^城も^禊〜^き集^の窓
 太平^の蕭^もある^三月^乃亭
 梅^夫
 杜^山
 風^水
 聖^水
 春^葎
 文^泉
 舍^檮
 排^潮

歌仙

豊後日田
高野連

寒^梅や^胡此^を娘^の穢^出〜
 置^鶴子^を〜^冬乃^日並^す〜^紀
 暮^小板^む〜^ろ打^音〜^市合^て
 す^な〜^返り^了〜^踏の^た〜^す滝
 存^り〜^まは^く〜^まき^杉の^月
 耳^小〜^さや^う不^社〜^ばは^窓
 大^屋敷^を〜^らは^のは^那の^園
 依^雨〜^来〜^り前^の〜^と是^は
 春^賀
 舍^檮
 蝉^雨
 柳^士
 春^水
 魚^舌
 吳^川
 過^流

窓風小静く歩むる猿用意 潮車

玩瑠日々り松林の音 呂英

かま船五月の末よほとて 魚舌

撞く入相おまさら未散る 妻賀

此頃のかほり胃平 出合宿 る流

征を姫多し秋乃守禪 蟬雨

床れ声いあきとやの 譯の寺 呂英

落し吐も墨跨あ海くむ 妻小

けり花の陰もやつこく 蟬かこ 柳士

船くぬるむ流り 宮川 吳川

風市三里二日役者のいぬき山 今持

怪言はくひりさうつきも 潮車

郵郭の備りかえある豆太の 妻賀

雪ふ舞一 母名のまら橋 桑古

おのののよせをうつは大湊 蟬雨

音はき川 武庫のふ雲 る流

一口と明こはのりれ鬼かほる 妻賀

人間の系事 西朝王樹の月 潮車

ある甲斐の有る 淋しき秋茄子 呂英

世帯たをきあ冥を系物 今持

日のたふかくくま井を流ちし
 荒本作里ふまら子ささまは
 著く多免涼しき庭の山ねろし
 浅しくとつとほ夕暮日
 かつさんの馬ふも雲うたふるり
 鼓の音のあま待し生かき
 天敵日花をほくし乃軽舟も
 ぬハもとよま及たのりま書
 抑士
 増る
 魚舌
 春水
 流
 柳士
 兵川
 呂英

汐干

日田連

人々の鏡も満ちし日しあ那 湖時雨

春雨

春もや二挺りちの川さく話 今

神祇書

八身の鹿もくほくや白ひ鳥 可曉

名月

満すく男と名も春明や難波橋 今

大津絵

けりき解くく白もや大津の巻は巻 春行

冬の心

芦枯く風ハいよく花の穂 春行

寒月

庵と影也 極月三五乃夜 全

顔見世

之相也 翁卷の影をの山 全

吹子祭

吹の如日也 吉備の中山祭り 岩 全

梅

枝くや枝一足のんめれ 花 舎 棹

四季

河すこの瀬 春ふき 市原梅の忌 故 曉

船免しを以川 曉を回もきた

影と背はくく 湖の草 始 免

首名能 擗ハ以川 ち明乃 響

氷柱

帆鳥の眼もあや何ん 神水柱 鳳水

冬

楳能 方也 擗 飼り

宿の心をぬし

夢の沙千窓

夕千やあふ振袖の百ちと望 桃文

二星

野鴉も幾多す揺の一夜うか 全

良夜

と宵し月篝よませし神ふ爰 全

後月

名月やすちをち二度の若目鏡 全

逢ふ逢ひ恋

思深く濃る名や侍屋の時を 少年 桃秋

柳

吹ぬ日ハ己りうとさやあまう糸 挑潮

雪の降

雪の降日又涌く津乃満十哉 全

後月

秋あぬ月秋実也十寸の葉 全

九月盡

松としてもかこらぬ之若る秋 全

神花

咲花もふ十一の雪しるも全

探題鐘

紫探もすくくうありさる那 楓遊

湖の夏

夕去々ぬ海ハまきと能まこのふ 全

時雨の猫

寤やぬ海くりたけしぬ小水時雨 全

老馬

雪降し己く月毛乃月明り 全

あぢ

古寺や衣買ふ寺も枯屋あき 全
全停

風

あつし又揺るや猿のはくも髪 梅文

下戸

糸をえりけのこを花のえとる事 九鼻

茶餅恋

名ハ下戸又茶川や草津の焼探 全

踊

鳳凰よりさらきて雀たときり 全

名月

と音のふことさくおをきき 全

盃

心奪う心賦はく極の日和川 都曉

時計

玉琴は海々々々律の志々川 全

液雨

酔つらぬ梅々の寐を初時雨 全

團爐菓

あさほ火よふ々の涙の泌りか 青角

窓ふ達窓

うきこもも眼は精蛤の品飛う那 全

名月

寅は起くやすらう上の月見哉 舎持

神祇春

梅咲や猶満すかゝ 神樂扇 千夕

茶の扇

陰名もおしめはきか死袖あふさ 全

釈教秋

摸の葉も拂子よかまへ初あじし 全

冬の祝

雪も幅左右よ頁の雪を飛 ありま 全

奉納菩薩神

梅此名を分てはくし其乃ゆり 八嶺

神祇考

弘月少神もちくのけり言哉 全

二星

中川の一夜をほし乃掟うち 全

石路

犬差ゆや山下井戸の舊りあり 全

液雨

志くくやかさねる山をゆき 全

揺

以初おきくくよ人のまの音哉 里水

白蓮

あの花ゆやちと多乃白帯 全

踊

一鶴りくくすねとまの舞か 全

雪

草ハ根より床までふつの花雪哉 全

物云文拂

傾城乃誠あは日や神せり 全

三月

高野

を川音待をくまそ甚の暗影山 蟬雨
野公

山を見得釣の翁やほく子以 全

良夜

名月や若くはあはれ訪の海 全

雪

元山の甚ハ来よりまを 乾の書 全

治國平天下

投る皆若くはさくさぬ所をうか 半時苑

接招 おま略

全高野

雪高くくまなく 軒の笑ひく所 呉川

月影の光くまなく 乃氷り可奈 春賀

風言さ日の邂逅や冬乃山 久 柳士

以川戸て此州の如くやあ仙花 春水

室梅より夜の明あめる 軒端哉 魚舌

本よ州の海多や玉の初あき 方瓜

月言く何くさる松の音見のふ 朝車

全

まも本も時以て海をま 雪乃花 蟬雨

八千坊大雅筑前怡土郡

おさくちの老と老とハたの多頭巾東村 紗葉

あまあり略す

新あさんとして来たる雪の結全博多 蝶童

神の湯をたゞし今博老後ま
福しきもは飛蓬の室身まのふ

字を舟指那やまのゆきま行脚 佳門

前玄畧

全福岡
僧

朽葉の中より冬月さん 波敬馬

全

はむちや水ハ三門ハ海川てん同國 萬籟

挨拶

肥前
濱崎村

冬小春をくも海や 花の浪舞あ 甘父

餞別

寄陽

早さるや箸をさるり 縁す利 亀叟

自入門を記す二章

入門の旭かやあ 冬小春を別全 可旭

魚目しるや追くぬ 古も室の結全 百洞

饒子 昔を懐くと利をりふ

ふぬや海き重乃 奥おも豊の物 百洞

飛也ゆきやふもくさして 雲の空 可旭

銭別前出略

寄陽

室竹や世乃枝打ま川乃の印

岸臺

全

夫那鶴を志白くそ免よと釣の

少年

品女

浪華の家通い子村九尺り持のお
崎向の腰よしてけい免と謂し所
々又無を向しして風殺のまり
流うく波集しこし小論の儀し
おうく予も老存也出候の日よ
いなり

在寄陽

洛

紀原

坤子夜ともあふ縁も

妙の江くも

日田點連社 各銭の白一冊

る記しあふすし列をうらむ

室梅の守り抄こやばくし 風 桃之

その出略

をしひまし又あふ坂り香の梅 九阜

全

寸あむふ吟や難波のまときり 蟬雨

全

引あねちうくもあふれをきり 里水

全

未度さゝる少くや冬の人の心の雪 春水

全

雪分く梅咲及の飛海さの那 魚舌

全

とわくふ雪の日をしあや沙を梅 葉吹

全

冬も潮古口の梅咲少ゆひのま 松丈

海岸より先生の海上の雪と
おとぬきて

ぼくの如く海をも浪の花見の糸 梅潮

銭子

香はうつ玉の心残や梅は春の乃 車斗

全

枝も帆も静少らこの 宿乃春 青角

先生の事を思ふとき

六年

くこそものもやみとまの心海哉 梅口

銭子

又送るやあまはく 春の衣くらり 虫飛

笑園くをぬ抱す梅は春の雪を
たすふ号をいふ切といふを春

枝の心れ代々を築くも冬はをき 儿山

銭子

妻よ又笑ひ合せん冬はれんぬ 斗子

五しり柿の集り酒と煮の二品
食しと冬老の云々

沙乞院送 里して亦於茶や柏餅 故曉

深澤亭先生初冬より室を掃ひ
壬寅月めの沙乞出くばりしり
船修無難を笑し

春ちのし 廿二事よふを夕附日 春荇

餅子

まゝあつたともあり魚し沙乞川 魚人

全

心は白き日よ暮るらん雪の志をん 岩秀

全

遠くと繋ぎなみはれ春はれ人 杜山

全

宇梅や 屋うて 浪生舟 何をさ 塘 月吞

八千羽の雀の名残を惜みて郊外は
さるる志うは又つ浪もまの
ぬきつちをうとてあま

籠るも免くたし 餅の花見丹 鳳水

八千坊の竹より法好まるとくま
へやや文司赤馬は印をくこひあ
ま梅坂の袖はすくめて

屋あそ妻の白りて 筑らん坂乃梅 宇柙

餘りや中流の自画を端に

筆字一雨を挟く浪乃美 其外

一や席は侍と云

室をわく難波や海舟枝くとき 時尋

先づ宿路を歩ぬふり

根も富むや冬に探を並みや 湖時

深き亭の河のお宿をくたふ

浪兼津の冬に飛く人片をく梅 梅支

空

夜ももろに友や柳の浦ちと 李 柳秋

竹ふまふ井川とふ名所ハ巧と

舟も川に流る浪路や冬乃む免 千夕

先醒のぬ板を繋し尺舞を日

寒梅よ難波の笠れ一はくの家 舎柳

空 全書略

指南車ハ跡して古片は雪乃人 沖文

空

袖と袖や抱く雪の首遅入 雲画

空

切を川くとき花散はく冬子とき 鬼風

八千坊先生より久くはすくはすくはすの
よりいふ時より書を記すよ
皆も何侍たし 橋乃らしし 州
播州 姫府
紀文

送帰坂

重走は月もむあ日の寒さこの春
全 亀齡

偶おあふるるをたたく忽ちあまてあぬ
深駒乃又ありそめこく

むすうらぬ雪は柳や駒の聲
全 青海

前書書

寒年高し月も寒さこれ口の星
全 南丘

稀人の旅やとまを宿ひてお流の
まじちなくあまぬ

見帰ってらるこくおんしし乃る
松鶴

柳

春はかへなまぬ 娘や門やあさ
全 松

退潮 三章

うねけくや何國し月のもは
踏甲斐やあま星は江の志まゆ
蛤乃あし里よりや 神のまし

春恋

小春かちのぬしや垣まし柳腰

初夏吟

京近し 草の原庭の風け先

豊前川筋連中の神状

麩冬ハ思石ヤセウ也餅粟一斗
 三斗小豆一斗葱白の所^所竹芽志
 赤豆ハ好物也^所日蓮上人の
 油比^と紀酒五斗^と赤豆^と白豆^との^所
 不^不栗の餅^とササ^と信^と汝^と法蓮花^と
 一字一斗九斗餘^と久^と長^と飯^と上^と
 也^とて^と米^とと^とち^と粟^との^とち^とし^と半
 圃^圃字^字の^のお^おく^く河^河川^川手^手古^古祀^祀を
 永^永き^き妻^妻侍^侍の^の心^心を^をま^まく^く糸^糸口^口謝^謝し^しと^と

今持

歌仙

神祇春

河品 富田林

鶯の織^織出^出す^す神^神乃^乃所^所し^しき^きく^くな^な
 夕^夕あ^あり^りあ^あり^り廿^廿四^四代^代の^の膳^膳
 妻^妻如^如風^風塵^塵海^海く^く矢^矢を^をま^まけ^けり^り
 飯^飯名^名か^かく^く産^産と^と其^其字^字と^とあ^あん
 家^家修^修又^又蓮^蓮く^くさ^さい^いの^の月^月の^の色^色
 七^七天^天去^去く^く一^一海^海ハ^ハく^くあ^あも
 古^古寺^寺や^や新^新の^の別^別道^道乃^乃雲^雲花^花色^色
 此^此江^江山^山を^を傾^傾ち^ちし^しと^とて^て

櫻桂

語上

小田輝

南溪

竹浦

分菴

巴夾

桂

瓜形もまゝ、その後の杉乃ッ云
 世変は是様燥着る着い居
 籍の付と足と里は所々
 礼耳、余ッく想ハるゝ海く
 千世ハ代八十一通文章の流
 影もまゝく又多うね居り夜
 かのこの信ありきとハい居り
 着狭を喰ふと腹に石替
 業もまゝくぬ子代を所名
 室もまゝく何とをまゝくしられ
 全 浦 輝 全 溪 上 董 全 溪 全

出もまゝく無き業しと様
 當りて不意用と物火
 汚害語あらくもかあも番代
 法語油切ふ法標すうらん
 待もまゝハ思りぬら玉の事
 延川ちくく川岸にう関
 白雲や仕下証すまゝあらん
 二十四時の百會かゝ聲
 何の店目居のたの鏡
 全 植 上 董 全 變 全 浦 全 輝 全 變 全

糸車いともかしく糸病より

南溪

懺罪きよきしの松茸と云

樹存桂

漬る多しあむ屋う糖汰瓶

詠上

中進の糸もきよきと云

小田輝

相傳の安房う糖糸く船の教

巴夾

侍若無人山あり

竹浦

凡流家あり流く糸の安

分蘆

漬る砂少しもきよきと云

執筆

上巳

富田林連

餅も草結ふ神の祭りの草

樹存桂

名目日書りあり

今宵かくうけり花のまはる

南溪

神祇表

神くいさけ若叶哉草歌の友

詠上

斗滝山子詣り

谷鳴るや糸又結ふ糸ぬ滝の音

竹浦

植屋山峯日老松あり俗人く
多松とく不遠又橋唐海まても

笠松やさすハまはれ日酒唐あり

小田輝

暑中吟

富田林

その清うく山は鈴く河川さか 分蘆

神祇春

神籬も解くやけつれ百子鳥 巴夾

餘寒

備前射越

解く雲も臆し月は水りり 蒿夕

丹五

くふのまき蓬を斬り雇ひ書

七夕

手白如夜をも花雪如跡烟哉

中元

来ても来ぬ客も本槿の花又哉

夕吟

吟あつて草をちうくやらつたる

雪

皇都

見く思ふもをさるとなかし 雪こほ 采花

去興

作尺

多さしやあましく 物を夕暮 青千

題鹿

馬鳴くといふ其世の極もち

春興

腐き軒

明石

簡世

偏〜水ぬや

ん多の花

苦熱

抱あの奴

全

縁〜花〜夜〜志

茶〜心〜ち

